

昭和20年度業務報告

第一 漁 撈 部

1 底曳網漁業試験

- イ、目的 食糧増産に資せんとす。
- ロ、出漁区域 自北緯34度 東経36度20分 至北緯34度30分 東経137度
- ハ、乗組員 船長以下10名
- ニ、漁具 機船底曳網

2 代用染料試験

- イ、目的 18年度に引続き代用染料の試験を実施せり。
- ロ、染料 樺の樹皮、ドングリエキス、旭日印染料、カッチ
- ハ、試験糸 綿糸30番手 6本合
- ニ、研究結果 漁網染料用クニン剤不足のため代用品試験を実施せり。

試験糸及び染着液表

番号	染料の種類	糸の種類	糸の長	白煮後重量	染料	水	沸騰点に於ける染溶液
1	樺の樹皮	綿糸40番手合 6本合	19 ^米	19.9 ^g	130 ^g	1,300 ^{cc}	290 ^{cc}
2	ドングリエキス	"	"	20.1	20.1	328	290
3	旭日染料	"	"	20.4	20.4 ^{cc}	356	306
4	旭櫻印カッチ	"	9.5	70.4	10.4 ^g	34.5	314
5	白煮糸	"	"	9.8			

試験表

回数	浸漬前	1週	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
検定月日	8月8日	8.15	8.22	8.29	9.5	9.12	9.19	9.26	10.3	10.10	10.17	
淡水浸漬日数		0	7 ^日	14	21	28	35	42	49	56	63	70
樺樹皮	{抗張力度 {伸張度	1.67 ^{kg} 8.4 ^{cm}	1.57 8.5	1.18 6.7	1.20 6.9	0.78 5.7	0.99 6.4	1.11 6.5	1.02 7.3	0.84 5.8	0.61 5.5	0.43 4.6
ドングリエキス	{抗張力度 {伸張度	1.49 ^{kg} 9.3 ^{cm}	1.37 7.1	0.43 4.1	0.68 5.6	0.60 4.5	0.68 5.6	0.50 4.4	0.14 3.1			
旭日染料	{抗張力度 {伸張度	1.54 ^{kg} 9.2 ^{cm}	1.57 7.6	2.63 7.5	1.66 8.2	1.66 7.7	1.62 7.8	1.50 7.3	1.36 7.0	1.23 7.4	1.06 7.6	0.85 5.6
旭櫻印カッチ	{抗張力度 {伸張度	1.57 ^{kg} 8.8 ^{cm}	1.24 7.3	0.39 3.89	0.46 4.7	0.60 5.3	0.25 3.9	0.26 3.6	0.25 4.6		0.14 4.0	0.05 2.7
白煮糸	{抗張力度 {伸張度	1.37 ^{kg} 8.5 ^{cm}	1.16 6.3	0.11 2.6	0.11 2.5							

樺の樹皮及び旭日染料は優秀なるも、ドングリエキス、旭櫻印カッチは一般染料に比し劣れり。

底曳網漁業試験表

深 度 (尋)	280		200		190		260		230		185	180	145	120	120	120	120	85	80	80	80	80	80	40	30	32	30	30	24	22	22	22	18	18	15				
	分	尾	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト																										ト	ト	ト	ト
サガミノコダラ																																							
アオメエソ																																							
スミクヒ																																							
ユメカサゴ																																							
ホッコクエビ																																							
ネフロープス																																							
ボタンエビ																																							
サルエビ																																							
ギ																																							
タカアシガニ																																							
ギンアナゴ																																							
アカエビ																																							
ミスダコ																																							
イ																																							
テングヒゲ																																							
カガミダヒ																																							
オキナマコ																																							
アカムツ																																							
ギンメダヒ																																							
ニギス																																							
ベニテグリ																																							
アマダヒ																																							

第二 製 造 部

1 塩乾品製造試験

水産物栄養製品の増産に資せん爲めに本試験を施行し、資材の節減とその價値を調査すると共に縣立三谷水産学校生徒をして実習せしむ。

イ、試験場所 本 場

ロ、試験期日 昭和21年3月18日

ハ、試験経過

原料並に処理

原料は比較的多量に陸揚さるる、深海産の極めて新鮮なる「エソ」、「メヒカリ」を撰び、「エソ」は背開に「メヒカリ」は丸乾となして夫々次の塩水中にて浸漬後日乾する。

塩 水 A. 海水(比重 Bc 3 度) 100 cc + 塩 3 G = 比重 Bc 5 度

B. 清水 100 cc + 塩 5.3 G = 比重 5 度

塩 漬 何れも 5 時間行ふ

乾 燥 晴天にて延 12 時間日乾行ふ

試験の成績

項 目	成 績
塩 味	AはBより多少苦味あれど両者共稍々良好なり。
乾 燥	乾燥は特に注意し硬軟の中間的な適度を得る。

歩 留

項 目	原 料	調 理 后	塩 漬 后	乾 燥 后 (製 品)	摘 要
割合 (%)	100	63	61	35	原料「エソ」の製品を調査
A, B 両塩水対照表					
A (%)	100	—	85	45	原料「メヒカリ」製品を調査
B (%)	100	—	86	44	〃

生 産

塩乾品 14 貫、販賣 10 貫、價格金 350 円也

ニ、結 論

製品は一部試賣をなし品評を求めたるに両者共好評を得る。

元來本試験の重点は乏しい塩の節減を図るにあつて、塩の使用量は A は B よりも少く、而も食用價値に於ても何等劣るところなし。

2 冷凍製塩並に鹹水利用試験

時局の要請に伴い本年は臨時部事業として、本試験用冷凍製塩施設工事に着手せるも資材難により予想外に延引し、年度内に完成したものは僅かに家屋建設工事を見るに過ぎず、誠に遺憾とするところで、次年度へ継続するの止むなきに至る。

第三 養 殖 部

1 小 鮎 移 殖 事 業

移 殖 概 要

イ、移殖期間 自 昭和 20 年 4 月 20 日 至 昭和 20 年 5 月 20 日

ロ、購入先 滋賀縣水産試験場小鮎配給協会

ハ、放流数 河川放流 1,096,000 尾

内 訳

縣 325,000 尾

組 合 771,000 尾

養殖池放養 1,168,000 尾

ニ、河川別放流数

水 系 別	河 川 別	尾 数
矢 作 川	矢 作 川	225,000 尾
	名 倉 川	85,000
	男 川	157,000
	岡 崎 市	35,000
	段 戸 川	35,000
豊 川	寒 狭 川	165,000
	三 輪 川 下	37,000
	豊 川 上	80,000
天 龍 川	振 草 川	125,000
	下 津 具 村	40,000
	豊 根 村	40,000
庄 内 川	庄 内 川	72,000

ホ、池中養殖斡旋先並に数量

住 所	氏 名	尾 数
宝飯郡長山村	加藤義太郎	72,000 尾

2 稻田養鯉用種苗配給事業

イ、総 尾 数 682,900 尾

内 訳

額田郡 岩津町農業会 50,000 尾

八名郡 七郷村農業会 11,000 尾

東加茂郡 旭村農業会 78,500 尾

北設楽郡 田口町農業会 44,000 尾

北設樂郡段嶺村農業会	25,000尾
〳 上津具村農業会	18,400尾
〳 三輪村農業会	15,000尾
〳 豊根村農業会	35,000尾
豊川市豊川町農業会	85,000尾
額田郡常磐村農業会	34,000尾
南設樂郡長篠村農業会	17,000尾
北設樂郡名倉村農業会	85,000尾
〳 御殿村農業会	35,000尾
〳 稻武町農業会	45,000尾
〳 振草村農業会	35,000尾
〳 下津具村農業会	35,000尾
宝飯郡小坂井村農業会	35,000尾

ロ、試験成績概要

稻田養鯉事業は農山村の副業として経済的資源開発上最も有利なるを以て、本縣に於てもこれが模範的經營の普及徹底を計る目的を以て、本年度に於て委託の方法に依り本試験を下記の通り実施せり。

委託先 南設樂郡長篠村

個数及び面積	2 個 285坪
水 深	最深5寸、最浅2寸5分、平均3寸5分
放 養 月 日	昭和20年7月23日
体 長	1 寸
放 養 尾 数	17,000尾
取 場 月 日	昭和20年10月20日
取 場 尾 数	7,650尾
植 付	昭和20年7月5日
刈 取	〳 年11月26日

3 鳥貝漁期及び万牙の目合の制限に関する吟味

緒 論

鳥貝は愛知縣の主要貝類の一つであるが、その豊凶は極めて著しくその予測が出来ないが、本年は1945年以來の大豊漁で縣下で採取した数量は150万貫以上と推定されて居る。

漁場は伊勢灣では常滑地先より横須賀地先迄、知多灣は全区、渥美灣は幡豆郡地先より大島周辺及び三谷大塚地先で、底質は何れも泥及び砂泥質で、水深は5米—10米である。併し漁獲少なき年は知多灣奥部の小範囲のみが漁場といつても過言でない。

漁員は何れも打瀬網による万牙曳であつて、大型打瀬では大万牙（巾6尺牙の間隔1寸2分）が使用され、風力により1個乃至5個に調節する。

小型打瀬網は搔万牙（巾3.5尺）を使用し、イカリ網30間にて巻よせかえして、1日多きは2,300貫を漁獲する。これ等豊凶の原因となるべき要素には、産卵期及び稚貝時代の海況の適否が考えられるが、これ等については今後の研究に俟たねばならない。これ等鳥貝の漁期が1月16日より4月19日迄に限定されて居り、又、万牙の間隔1寸2分の制限があるが、これが決定の基礎を生物学的に一應吟味することにした。

○鳥貝の大きさ

鳥貝は前記の通り漁獲の期間が冬中に限られ、漁獲の方法が1.2寸の万牙に定められているために調査材料を万遍なく入手するに甚だ困難であるが、1943年以來の材料を測定した結果は第1表の通りである。

調査日	個数	殻		長	剥身量	全重量	漁場及び底質
		平均値	標準偏差	範囲			
1943 XII-22	158	7.26 ± 0.05	± 0.65	5.5-9.1			知多湾 砂泥
"	30	2.13 ± 0.10	± 0.57	1.2-3.1			大島東 "
1944 II-9	5	3.20		2.7-3.7			" "
1947 VII-18	119	5.63 ± 0.05	± 0.53	4.7-6.5			三谷港内 泥
1949 I-20	60	7.55 ± 0.07	± 0.53	6.5-8.5	41.79%	57-28	大島南 "
II-9	49	7.80 ± 0.06	± 0.45	6.7-8.5			" "
II-24	50	7.30 ± 0.07	± 0.50	6.4-8.3	43.91	58-35	三谷地先 砂泥
III-24	50	7.16 ± 0.10	± 0.70	6.3-8.3	45.09	59-36	" "
III-28	100	7.78 ± 0.04	± 0.41	6.9-9.4			三谷地先 泥

以上の結果より12月下旬には大小の2群が見られるが、小型群は次の冬即ち1年後には大型群迄に成育するものと推定され、漁獲の大部分はこれ等のものであり、その後の生存は一部の物に限られると見てよいと思われる。従つて現存の万牙の間隔が1寸2分（3.63cm）であることは、当才のものが齒より脱して漁獲されぬ理となる訳である。併し1寸2分よりもなお廣くても大型群の漁獲があるとなれば、操業上間隔を拡げるが適當とも考えられる。殻の最も小さい個所は殻巾であるが、漁期に得るもので5cm内外で最小は3.88cmである処だけから考察すると、1.2分拡げた方が適當かと思われるが、これは実験の結果を俟つて明かにしたい。

次に産卵期に就いては詳細に調査をする機を失つたが、2、3の調査では3月終頃より卵や精を見かけるが、5月より成熟し産卵は大休5月より6月中頃に終ると推定される。従つて漁期の終り4月19日は支障がないと考えられる。次に1月16日に就いては稍疑問を生ずるものである。第1表の如く剥身量の増加は漁期中続けられ又増率も大体変化ないから、剥身量の増加を待つてから漁獲するという意味は考えられない。又、殻長の増加は12月からは殆ど停止の状態であるから、これも同様考えられない処である。以上より推して筆者はむしろ正月前の高値をねらつて漁獲するが適當ではないかと考えるものである。